111 学年度第一学期ユーラシア財団（from Asia）国際講座
「アジア共同体：東アジア学の構築と変容」シリーズ講座（16）
テーマ：日本語探索―東アジアからユーラシアへ―

中国文化大学 111 学年度ユーラシア財団（from Asia）国際講座の第 16 回目は、本学日本語文学科の陳順益主任による「日本語探索―東アジアからユーラシアへ―」であった。日本民族と日本語が何処から来たのか？現在その定説は存在し梨。あるいは日本語は如何なる語族に所属するのか？これも従来、言語学者の議論の焦点になってきた。

日本語は日本固有の和語、中国伝来の漢語、世界の多様な言語に由来する外来語で形作られている。陳先生は冒頭で日本語の漢語発音について分析し、後に日本語の和語とヘブライ語を比較し、両言語の関連性について探求した。

日本語における漢語の発音的特徴

陳先生は日本語の漢語の伝来した時点が一定しないことを指摘し、それは漢字音（発音）が一定していないで、呉音・漢音・唐音などの種類があるからだとされた。漢音は唐代の長安付近の発音を指し、遣隋使・遣唐使によって大量に日本に伝わった。呉音は中国南方の呉国の発音で、５、６世紀に朝鮮半島を経由して日本に伝わった。唐音は宋音ともいうが、宋代以後に日本に伝わり、その多くは仏教用語であった。例えば、「行」は、呉音では「ぎょう」（例えば「行政（ぎょうせい）」）、漢音では「こう」（例えば「銀行（ぎんこう）」）、唐音では「あん」（例えば「行脚（あんぎゃ）」）である。

また、陳先生は漢字音が中国から伝わったものであるため、必ず漢字の発音ルールによって規制されなければならないと指摘した。台湾語と台湾華語の漢字音から、日本語の漢字音を大まかに推測できる。原則として、台湾華語の発音、台湾語の発音、日本語の発音は同じである。

陳先生は日本語の特殊な発音である促音と撥音の発音ルールにも触れた。促音は中国語の入声語（P・T・K の三種の発音）に由来する特殊な発音であり、例えば「納豆（なっとう）」、「八本（はっぽん）」、「学校（がっこう）」などである。撥音の発音ルールは台湾華語の発音「ㄢ (an)，ㄣ(en) 」に発する発音で、日本語では原則として「ん」で発音され、例えば「安（あん）」、「陳（ちん）」などである。上述の特殊拍、及び単音以外、日本語の単音節の２拍の漢字音は、い（ｉ）または う（Ｕ）と発音される。

日本語とヘブライ語の相似性

日本語とヘブライ語の両言語間には不思議な相似性がある。ある種の専門

家は日本に古代シュメール文化やユダヤ教に似た風習や文化が多くあることを発見し、「日ユ同祖論（いわゆる「日本人とユダヤ人の共通祖先説」）」という仮説がある。この「日ユ同祖論」はスコットランドの宣教師のノーマン・マクラウドが布教の便宜のためにまとめた一連の説で、日本人はユダヤ人の「失われた10部族」であるという見解を唱えた。ただし、これまでの鑑定結果では日本人の遺伝子とユダヤ人のそれとの間には共通点がないことも判明しており、歴史家は「日ユ同祖論」について慎重または牽強付会の観点を提示している。

陳先生もこの説には懐疑的だが、ただ、もしも言語学的観点から見るならば、9000キロも隔てられた遠い言語間に偶然の共通点があることは不思議だと感ぜられるという。例えば、日本の天皇家の家紋である菊と古代ユーラシア文明（エルサレムの北にあるヘロデ門）との関連性、ヘブライ語で初代神武天皇の名を読むことが可能である点、日本の天狗とシリア人が礼拝で使う物とが似ていることなどである。川守田英二は『日本言語考古学』などの著作で多くの事例を提出し、文章の類似性、発音の類似性、日本の国歌のヘブライ語への翻訳、民謡の歌詞の意味など、日本語とヘブライ語が多くの面で非常に似ていることを指摘した。

陳先生の結論は言語学的観点から見て、日本語の中の漢語は疑いなく中国伝来であり、その漢字発音は或る程度台湾華語や台湾語から推測が可能であるということである。ただし、日本語の中の和語には遠く隔てられたヘブライ語との間に不思議な共通性があるが、これが言語の恣意性の原則に反する。したがって、日本語と古代ヘブライ語との直接的な関連性は認められないが、今後の客観的な研究で確認されるべきだろうと述べた。

（網頁連結：https://eurasia.pccu.edu.tw/index.php）

（撰稿：鍾季儒　日文系・助理教授、日本語：齋藤正志　日文系・教授）